

現代女性文化研究所

The Contemporary Women's Culture Institute

ニュース

No.36

題字／望月百合子

NPO 現代女性文化研究所

〒112-0011 東京都文京区千石4-32-6

電話 03-3941-1007 FAX 03-3941-7577

ホームページ：http://www.gjk-j.com

E-mail: gendai-j@almond.ocn.ne.jp

講座

「田岡嶺雲の新しいさ」

脱近代の先駆

講師 西田 勝さん

(文芸評論家)

私が田岡嶺雲（1870～1912）の研究を始めたのは1951年で、以来62年間ずっと続けています。調べれば調べるほど教えられるところが多い。嶺雲の名前は漢詩から取られています。中国の有名な学者、陶弘景が皇帝から役人になるよう誘われますが、「私は総理大臣になるより山の嶺の雲を見ていた方が楽しい」と答えた詩から来ています。田岡嶺雲の研究は今や国際的になり、ロシアやアメリカでも研究する人が出てきていますが、まだ肝心の『田岡嶺雲全集』（全7巻・西田勝編・法政大学出版局）は配本を始めて40年も経つのに完結していない有様です。既刊は4巻（第1～3、5巻）、最終巻が出るまでには、あと5、6年かかるでしょう。第6巻は古代中国の思想家や詩人の評伝で、引用文は白文なので、まず書き下し文に直し、広辞苑に出いていない言葉については注をつけるなど、読みや

すくするため、毎日格闘しています。嶺雲は1870年に土佐の高知で生まれました。小学校時代から自由民権運動に加わり、3、4年生の時、「政談演説」をしたという日本最年少の弁士でした。民権運動が彼に与えた影響の最大なのは、人権の思想です。当時、「天賦人権」と言われました。人権というものは天から与えられたもので、人間は本来、自由で平等、そして生まれながらに生存する権利——「生存権」があるという思想です。嶺雲は1890年に上京。翌年、東京帝国大学文科大学漢文科選科（現・東京大学文学部）に入学、在学中から評論活動を始めています。彼が思想家として決定的な影響を受けたのはショーペンハウアーです。戦前、学生の間で「デカンショ、デカンショで日が暮れる」という唄が流行りました。デカルト、カント、ショーペンハウアーを縮めて出来た言葉です。彼は、中国語は勿論のことドイツ語、英語もよくできて、日本で最初に中国文の日本語訳を始めた人です。また、それ以前、彼は主としてショーペンハウアー哲学によって中国古典の近代的再生（ルネッサンス）を試み、莊子・屈原・蘇東坡・高青邱などの評伝を書きました。

私が今、格闘している作品群です。彼は同時に日本で最初の本格的なハイネ伝も執筆しています。一般に中野重治が革命詩人ハイネの紹介者とされていますが、嶺雲は、それより40年も前に、彼を「恋愛と革命の詩人」として紹介しました。24歳の時には投書雑誌「青年文」の主筆となり、樋口一葉や泉鏡花の才能をいち早く認めました。一葉の代表作「たけくらべ」、「にぎりえ」のヒロインは娼婦です。嶺雲は社会で、もつとも差別を受けていた、これらの女性たちを「満腔（まんこう）の同情」を持って描き出した一葉を「まことの天才である」と絶賛。一葉が死んだ時には「一葉がもう一回生き返るのなら自分の命を捧げてもいい」とまで言いました。もう一人、彼が天才だと認めたのは泉鏡花で、鏡花は結婚の否定論者でした。彼は「愛と婚姻」というエッセイの中で結婚を「憚りなく直言すれば、婚姻は愛を拷問して我に従はしめむとする、卑怯なる手段のみ」と言っています。彼の小説が、あのようにきらめいて美しいのは、一つには、こういうラジカルな思想が根底にあるからです。嶺雲は後年、漱石の才能も高く評価しています。嶺雲はショーペンハウアーによつ

て、ウパニシャッドの中に語られている古代インド哲学の核心的な原理を知りました。その原理は一言で言えば「あなたは私だ」ということです。そこにホームレスがいたら「この人は私だ。彼こそ私のもう一つの姿だ」ということです。この核心的な原理がヨーロッパに入つてキリスト教の「隣人愛」の主張となり、アジアでは仏教となつて広がった。嶺雲は、この指摘に強い衝撃を受け、そこから、彼の東西両洋文明の統一という主張も生まれました。

他方、西欧から始まった科学技術が進歩し、交通・通信手段が発展すれば、国境を超えた新しい世界が出現するだろうと考えるようになり、日露戦争の最中に出た評論集『壺中観（こちゅうかん）』は人種・社会的・性的格差のない、国家を超えた世界共同体を構想したため発売禁止になり、以後の彼の主要な評論集はすべて発売禁止になりました。それ以前、嶺雲は日清戦争の最中、『小説と社会の隠微』という論説で作家たちに対して、資本主義が新たなもたらした道徳的頹廢（拜金主義）を描き出すことを求めるとともに、「下流の細民と文士」では、維新によつて「貴賤の階級」（封建制）は破れたが、貧富の格差が激しくな

った現実注目、貧者の運命をも素材にすることを呼びかけました。

彼の文明批判の起点は、「十九世紀を嘲る」（1894年秋）という文章で、文明による環境破壊も問題にしています。後年、彼は軍事費にお金をかけるよりも「無響の汽車」（モノレール）を作るよう提唱しています。

また軍拡競争を取り上げ、科学技術の進歩によつて戦死者の数が増加し、やがて「人類の種」が尽きる日がくるだろうと予言しています。実際、戦争の死者数は、第1次世界大戦以前までは3000万人、第1次世界大戦では10000万人、第2次世界大戦では1億人に達しました。経済の高度成長というものは裏を返せば戦死者の「高度成長」です。彼は愚かな軍拡競争に走るより、戦争のない世界を創ることに力を尽くすことが必要だと主張しました。憲法9条の先取りといつていいでしょう。

晩年の文章の中でも彼は「今日のお金が総ての物の一番貴いもので、之を儲け、之を貯ふるが為には如何なる手段をも辞せないといふ風は、現代の一大病癖であると信ずる」と言っています。私たちは、そのことを福島原発事故で、つぶさに体験したところです。資本主義の裸の姿

が、そこにあります。現在は資本のグローバルゼーションが進み、大資本は安い労働力を求めて国外に移り、大学卒業生の就職は困難となり、貧富の格差はますます大きくなっています。今から100年も前に、その構造に迫つたのが田岡嶺雲でした。

もう一つの主張は「女子解放論」です。この本『田岡嶺雲 女子解放論』（法政大学出版局1987年）は、それらの主張を集めたものです。「女子解放は男子解放也」として、女性の政治的な解放（女性の参政権）だけではなく、女性の経済的な解放をも訴えました。女男を封建的家族制度から解放するだけではなく、近代結婚からも解放することを求めました。

戦後、女性にも参政権が与えられましたが、日本では女性議員の数はまだごく少数で、恥ずかしい限りです。「生殖の原理から言えば女性は主であつて男性は脇である。だから男性こそ女性に媚びるべきである」と、人類以前にまで溯つて女男の関係を考えました。

嶺雲は、著書の多くが発売禁止処分を受け、文体も難解のため、長く忘れられてきましたが、ようやく彼の時代がやつて来たといえるでしょう。（まとめ 酒井須磨子）

新書紹介

『スーパレディ 長谷川時雨』

（ドメス出版 2700円＋税） 森下真理著

長谷川時雨について書かれたものはけっこうあるが、著者ほど愛情をもつて描く人はいないだろう。「旧聞日本橋」を読んで時雨にのめり込み、以来、半世紀にわたってひたすら時雨に打ち込んできた。時雨にふれる楽しさ、喜びが随所にあふれ出ている。

長谷川時雨は昭和の『青鞥』と称される『女人芸術』を主宰、多くの女性作家や評論家、詩人や歌人たちに活躍の場を提供し、新人作家を輩出した。林芙美子の『放浪記』はここに連載されている。

時雨は、何よりも女性が連帯し、自らの才能を開花させ、伸ばせる社会の到来を願った。そんな「文学者、一女性運動家の枠にはまらない」大きな存在の時雨に著者はあこがれ、信奉し、『私の長谷川時雨』を書き上げ、更に今回のエッセイ風評伝へとなった。

しかし、『旧聞日本橋』『近代美人伝』など優れた作品を残しながら、時雨の作家としての評価は今一つである。近年『女人芸術』の認知度はかなり高くなってきている。時雨への再評価もまもなくだろうか。（T）